

(国分市中央1丁目1794)

位置と環境

大隅国分寺は、国分市中央地内に所在する。後背地の上ノ岡（通称ウエノオカ）標高53.8m、愛宕山（通称アタゴヤマ）標高62.7m、城山（シロヤマ）標高192.6mを控え、南側は鹿児島湾に面した沖積平野へと広がる。遺跡地は標高8～11mの微高地上に占地している。

調査の経緯

大正10年3月3日に国指定史跡となり、昭和56年、昭和62年に指定地周辺の緊急発掘調査を実施した。寺の寺域、伽藍の配置等はいまだ未解明のままである。大隅国分寺跡の範囲確認調査を国補助を受けて行い、平成11年度から平成13年度まで実施した。調査は、国分市教育委員会が主体となり、鹿児島県教育委員会の協力を得て実施した。

遺構と遺物

昭和62年の調査では、遺構としてそれぞれ東西に延びる溝遺構3条、土坑1基を検出した。（第2図）溝1は、幅5.6m、深さ2.0mを測る大規模なもので埋土の状況からみても濠であったと思われる。溝2は、幅0.8m、深さ0.9mを測り、断面はU字状を呈し、埋土の状況からみて溝1と同様濠であったと思われる。溝3は、幅0.4m、深さ0.25mを測る。溝2と平行に走り、遺物は他の溝と同様、布目瓦が



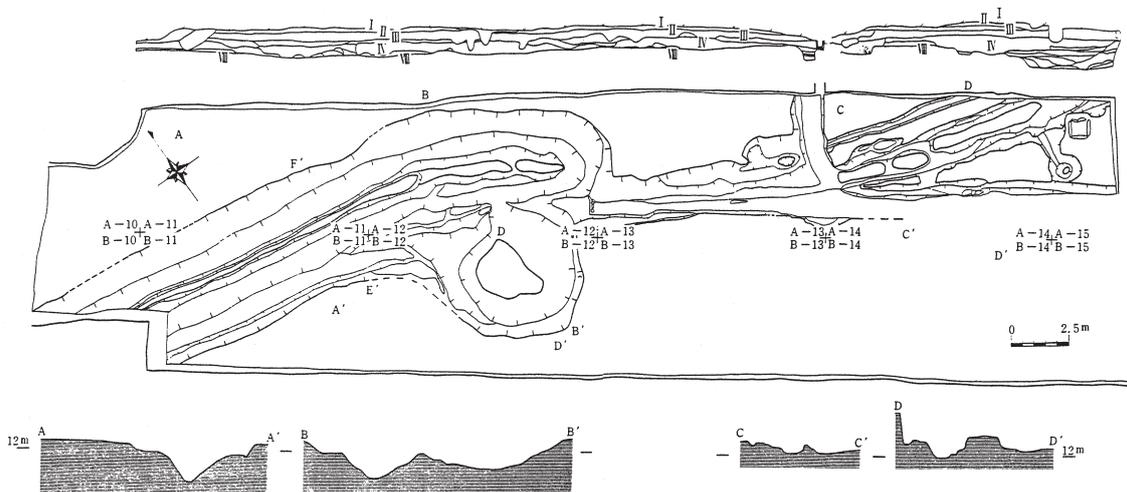
第1図 大隅国分寺跡の位置

ほとんどであった。溝3は雨落溝の性格を持った遺構であると考えられる。

土坑1は、溝1に隣接するかたちで検出され、形状は円形状の摺鉢型で、最大径6.2m、深さ1.1mを測る。埋土の状況や土坑の底面の状態からみて、土坑1は溜池であったと考えられる。

遺物に関しては、布目瓦がほとんどで、土師器、須恵器類の出土は、なかった。これは、大隅国分寺の中心地（伽藍地）から遠く離れていたことも関係していることが考えられる。

平成11年度から13年度にかけての調査では、昭和62年に調査（鍛冶屋馬場遺跡）し、検出した溝遺構の延長を確認した。その結果、遺構はさらに西側に延びることがわかった。このことは、これまで考えられてきた大隅国分寺の寺域がさらに西側に広がることを示している。



第2図 溝遺構・土坑実測図



第3図 大隅国分寺跡周辺地形図

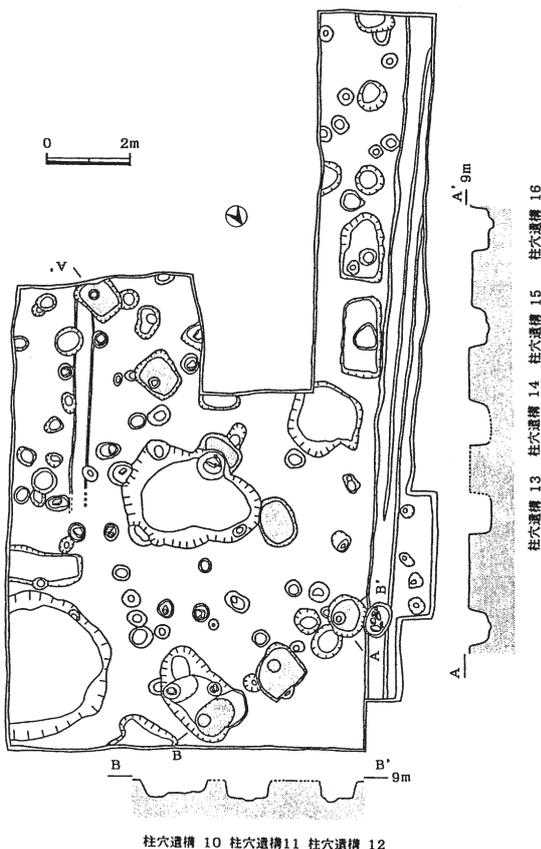
又、東西と南北に延びる柱穴列を検出した。遺構の位置関係から当初「食堂」の可能性を主眼において調査を進めたが、柱穴の配列状況から見て、他の国分寺に該当する食堂ではないように思われた。しかし、遺構の配列状況や柱穴内の土層の状況からみて、国分寺に関係する遺構であることは間違いないと思われる（第4図）。

遺物については、土師器の腹部に「文文」の2文字が書かれた墨書土器が出土した（第5図）。又、軒平瓦の中に、瓦当裏面に「朱」が付着した資料が出土した（I b・I a類）。

特徴

発見された溝遺構は、国分寺域の北限と思われる。遺構はさらに西側に延びることから、国分寺域はさらに西側に広がる可能性がある。又、軒平瓦の瓦当裏面に「朱」が付着した資料が出土したことは、国分寺の創建時の解明につながる可能性がある。

資料の所在



第4図 柱穴検出状況



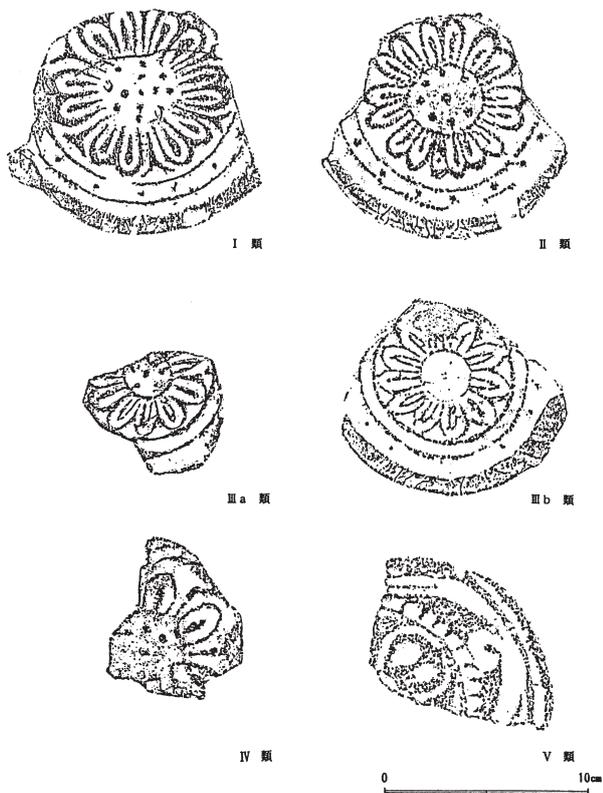
第5図 墨書土器

出土遺物は、国分市教育委員会に保管されている。

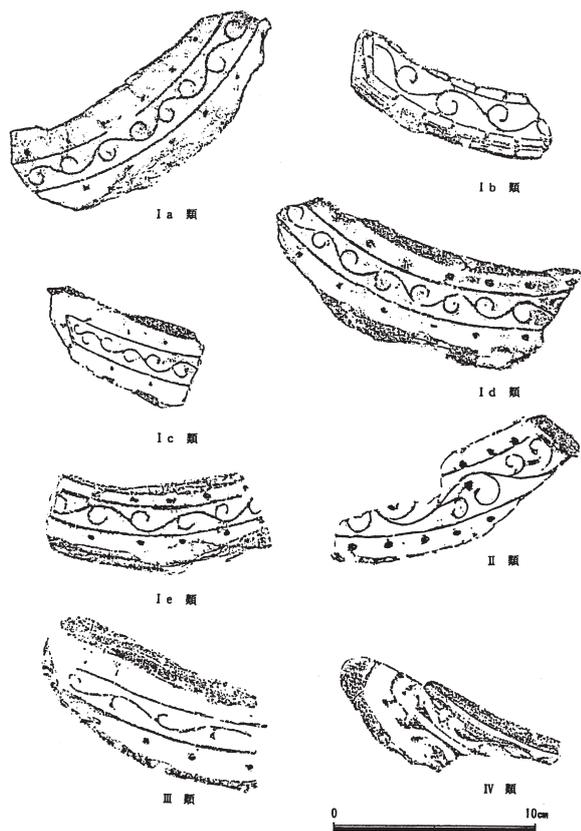
参考文献

- 国分市教育委員会1989「鍛冶屋馬場遺跡亀ノ里遺跡」『国分市埋蔵文化財調査報告書』3
- 国分市教育委員会1990「国府（小路）遺跡」『国分市埋蔵文化財調査報告書』5
- 国分市教育委員会2002「大隅国分寺跡」『国分市埋蔵文化財調査報告書』7

（鈴木順一）



第6図 軒丸瓦分類 (拓影)



第7図 軒平瓦分類



写真1 大隅国分寺跡多重層塔



写真2 溝遺構検出状況



写真3 柱穴構検出状況



写真4 墨書土器